

◆会長講演◆

学際的研究への志向

前原 澄子

I はじめに

本学会の目的及び活動は、その会則によると、「広く看護学の研究者を組織し、看護学の教育、研究及び実践の進歩発展に寄与することを目的とし次の活動を行う。云々」とある。類似した目的をもって組織された看護学関係の学会は他にもいくつかあるが、それらの学会との比較において、本学会の特質は何であろうか。最も特質とするところは、他の学会が職種を限定し入会資格を与えているのに対し、本学会は入会の門戸を広く開けて、多くの分野の職種に亘って組織しようとするところにある。

本学会総会の各回における出題演題をみると、医学、工学、化学、心理学、教育学、社会学等の研究者との共同研究であったり、それら学問分野の独特の研究方法を用いての研究であるものが目立つ。非常に複雑な生物的、社会的、文化的存在としての人間を、同じように複雑な人間との相互作用によって展開される看護を探究する看護学においては、従来の研究の方向性に加え、次元の異なる思考の回路において問題を見つめなおすことが迫られていると考える。それが学際的研究の必要性であり、広く各分野の研究者に入会の門戸を広げている本学会の使命と考え、学際的研究への志向を本講のテーマとした。

今日の学問の進歩に伴って、一専門領域がますます細分化され、専門家であるということは、より細分化された領域における研究者であることが条件であるというような傾向が多く、学問分野でみられている。広い学問を身につけている人を、専門がないとか広すぎるとかいて軽べつする傾向さえみられる。

科学の対象は、それが無機物であれ有機物であれ複雑な姿をもった綜合物である。人間にいたっては、その身体、心、行動すべてが複雑で、これらを理解

するためには突込んで細分化し分析する必要性が生じてくる。しかし、細分化が進み過ぎると不都合を来たすことになりかねない性質ももっている。この時に思考を変えて問題を見つめ直すことによって、問題解決への手段につながってゆくことがある。いろいろな事象が、多様化し複雑化している現代社会において、他領域をみ廻し、多くの事象に興味をもつ姿勢が必要ではないだろうか。これが学際的研究への姿勢であり、今日多くの分野でその必要性が叫ばれているところである。

まず、学際的研究という語について確認しておかねばならない。というのは、学際的という語が、すべての人に同一に理解されるとは限らないからである。「学際的研究は、今日の段階ではまだ発酵していないワインであって、その味も香りもまだ批判することはできない。」と評した学者もいる程に新しい考え方である。その語の解釈にも、いろいろの立場があるようである。

月並みであるが辞典をひいてみた。広辞苑の昭和51年の版には「学際」の語は集録されておらず、53年の版に「いくつかの異なる学問分野がかかわるさま」とあった。

Webster には、“interdisciplinary”の語は、“involving or joining two or more disciplines or branches of learning”とあった。

また、ピアジェの著した「諸科学と心理学」を訳された芳賀は、その訳書において訳者の注釈を付し、そこに interdisciplinary science を隣接科学と訳され、「諸科学の接点に生じる新しい科学の分野を指す。」と説明している。

現在の学際的研究を論ずるものを見聞してみると、1つの学問分野の研究に他分野の方法を使用することとか、学問間の境界があいまいである新しい知見に対して、今日的視点で体系化を図る、というように解釈も

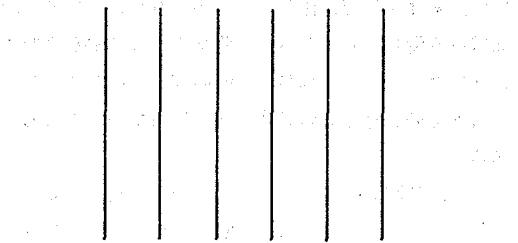
されている。

私は、学際的研究を異なる学問分野がかかわって研究し、新しい科学を生み出すことであると解釈し、この論をすゝめたいと思う。

これまでにも、複数年野の統合によって、新しい形へ学問が誕生した例はいくつもある。例えば、物理化学、分子生物学、生命科学などである。また、私らの分野に近い行動科学もその1例である。形態的にみた学際研究の種類を、中村の著書より引用し紹介する。

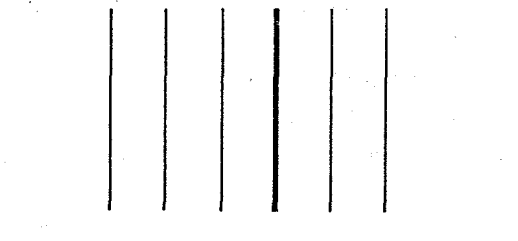
これは1978年にボストンで開かれた科学の統一に関する国際会議で、コロンビア大学のボレロ教授が説明したものである。

(1) 多層的学際性 multi-disciplinarity



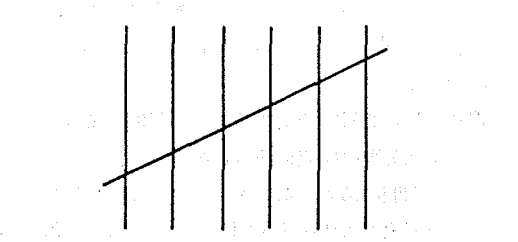
平行的あるいは無差別的な学際性ともいわれ、各専門の単純な並列型である。大学の学部の一列のようなものであって、相互作用は少ないと説明されている。

(2) 複数的学際性 pluri-disciplinarity



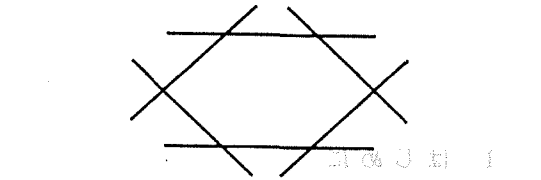
1つの主導的な専門分野があり、他はそれを取り囲んで存在し、それぞれの立場でなにがしの寄与をするものである。

(3) 横断的学際性 trans-disciplinarity



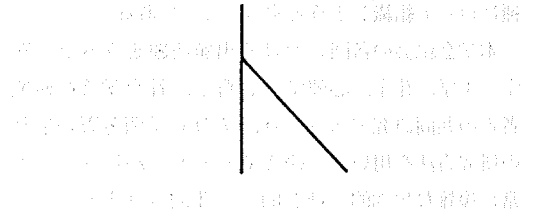
別名対角線的学際性とも呼ばれるモデルで、1つの専門分野が共通の分析的方法としてある場合であって、そのよい例が数学であると説明している。

(4) 複合的学際性 composite interdisciplinarity



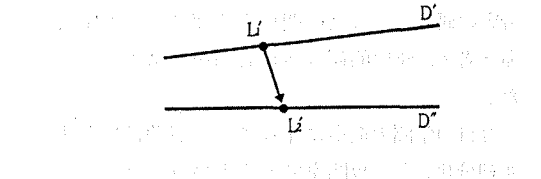
目的論あるいは規範的学際性と呼ばれるモデルである。共通の目的に対して、各専門分野の1部で協力するものである。どの専門も主導的役割はもたないので、制約的学際性ともいっている。しかし、各専門は目的達成に全力をあげることが求められ、それは定性的なものではなく、定量的な貢献であらねばならない。

(5) 方法論的学際性 methodologica (interdisciplinarity)



1つの専門分野が、他の専門分野を支えている形である。教育学が精神測定学の力を借りるようなものと説明されている。

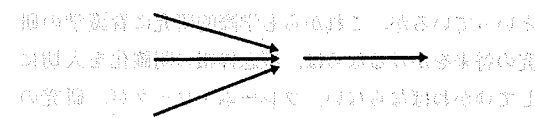
(6) 補足的学際性 supplemental interdisciplinarity



線形あるいはクロス学際性ともいわれるモデルである。Dの法則Lが、Dに用いられLという新しい法則をつくるのに役立つことで丁度、言語学と心理学が、言語・心理学の分野で協力するようなものと説明している。

(7) 同形的学際性 isomorphic interdisciplinarity

統一学的学際性ともよばれるモデルで、生物学と物



理学と化学の協力的統合によって、生物物理学が誕生したことがあげられる。

以上のようなモデルで示したような学問間の関係の発展から新しい知見、科学が生まれ、学問の進歩に寄与してゆくものである。その学問間の関係について、前述のピアジェの著書を参考に考えてみたい。

心理学者のピアジェは、1966年にモスコアで開かれた第18回の国際心理学会において「Psychology, Interdisciplinary Relations and the Systems of Sciences」と題し講演をしている。この講演を芳賀が英語版より訳し「諸科学と心理学」として著している。

ピアジェは、個別科学分野と心理学がどのように隣接科学として協力してきたか、及び今後し得るかを示し、学際的研究への1つの示唆を与えている。彼は、心理学と諸科学の関係を次のように云っている。即ち「心理学の未来は非常に興味深いが予断を許さない心理学それ自体の発展に依存している。それはまた、心理学が他の科学から利益を受けたり、または逆に心理学がそれらに利益を与えたりするという隣接科学上の関係のすべてに依存している。」と。数学者と生物学者、物理学者と化学者、生物学者と化学者の協力によって、新しい学問の発展をみているのに対し、心理学者はまだそのような形での協力の影響を受けるまでには到っていない。社会科学、人文科学が自然科学と異なって、隣接科学間の交流がみられないことを嘆いている。心理学者が言語学、経済学について知らなくてもよいということは重大な誤解であり、言語学、経済学側の心理学に対する無関心を批判している。そしてこれからは、心理学と隣接科学の協力のあり方を心理学と数学、心理学と物理学、心理学と生物学、心理学と社会学、心理学と言語学、心理学と経済学、心理学と論理学に亘ってのべている。この中から心理学と数学について参考にした。

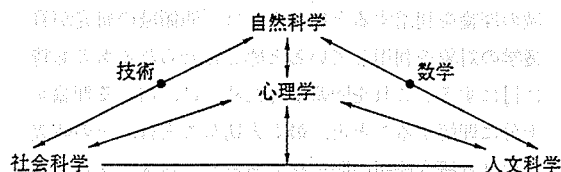
心理学は、数学から何でも得ようとしてきた。当然のこととして、心理学における統計の計算や検定の方法を数学に求めたり、確率を捉えようとしている。また、心理学における空間知覚の実験結果を数学におけ

る位相の概念と照合する研究等を示している。これらすべて、隣接科学間の交換をしているとは云えず、数学から一方的な貢献をうけているに過ぎない、心理学が数学に与えるものは何もないように思われると云っている。その理由は、数学が帰納的かつ形式的科学であることに対して、心理学は実験的科学であること、数学はすでに科学として2500年の歴史をもつものに対して、心理学は僅か100年であるということにあると云っている。

しかし、彼は高次の進歩をとげた科学が、1つの説明の水準にとどまることに対して疑問を投げかけている。事実、数学者の会議においては、その本質や基礎について問題にされており、これらの問題は数学教育に影響を与えるものであることが云われ、ピアジェはすでにこの課題解決のために、心理学者として講演を依頼され、心理学が数学に貢献し得る時代のきざしがみえていることを云っている。数学における諸構造の特性とその形成の問題を、心理学はこれら概念の発生と発達の研究を通し数学に寄与できることを説明し、これからの協力体制に明るい見通しをのべている。

各学問間と心理学の協力をのべて、科学の体系における心理学の位置を次のように云っている。数学は、自然科学と人文科学の中間に、技術は自然科学と社会科学の間に位置する。

ピアジェの諸科学の関係



心理学は諸科学のすべてに相互関係をもつものとして中心に位置を占めている。そして、ピアジェの主張は、自然科学の場合は、個別の間に階層的な関係があって相互関係が発見しやすい。したがって、自然科学の内部では学際的な協力がしやすいと考えられる。社会科学や人文科学の分野では自然科学にみられるような階層化は困難であると認めながらも、研究課題や研究方法の共通性を考察するならば、協力は可能であるとみてよい。

さらに、社会科学と人文科学相互間でも突きつめて

いれば必ず人間がからんでくる。したがって、社会科学と人文科学をまとめて人間科学と呼ぶ場合も出てくるほどに協働可能性が大きいとみている。

1966年のピアジェの講演から20年経った現在において、心理学は科学としてより確かな位置を占めるようになった。これより看護学の学ぶところは多く、また看護学にも学際的研究への勇気が与えられる。しかし、その第1の条件は、看護学が力を存分に発揮できることであることもここから学んだ。

以上のような学際的研究のあり方、心理学における学際的研究の発達を歴史をみて、これからの看護学研究の姿勢を考えてみたいと思う。

まず、他領域における理論を学際的に利用して研究を遂行することは、看護学の研究でよく行われていることである。研究の能率をあげ、効果をあげるために決して悪いことではない。広い視野に立って他領域を理解することは、問題解決へつながるものであることは、冒頭にも述べた通りである。しかしこの場合、絶対に回避しなければならない大きな危険性がある。1つの理論を研究において用いる場合には、その理論をしっかりと理解していることが前提であることはいうまでもないことである。学際的研究の場合、他領域の理論を十分に理解しないで、単に目的有用性のみによって用いることは、許されるべきことではなく学際的研究とは云えない。これをあえていうならば、集学的と云えるだろうか。看護学の研究において、他領域の理論を利用するというよりは、他領域の研究が看護学の対象を利用していると感じさせられるものも時に目にする。これを回避するためには、用いる理論を十分に理解すること、最も大切なことは、その研究における概念枠組の明確化であろう。看護学プロパーの研究方法があるかどうかということは、大変難しい問題である。内海は、看護学は本質的に学際的である

といているが、これからも学際的研究に看護学の研究の将来をかけるならば、概念枠組の明確化を大切にしていかなければならない。フレーム・ワークが、研究のオリジナリティを決定することになるからである。

従来の看護学の研究における学際性は、先に述べた方法論的学際性、即ち1つの専門分野が他の専門分野を支える形、また、補足的学際性、即ち1つの法則が他の分野に用いられ新しい法則をつくるというのに該当するであろう。

そこで、もう1点私らが志向しなければならないことがある。複数的学際性即ち、1つの主導的専門分野があり、それを取り囲んで存在しそれぞれの立場で何らかの寄与をするという方法においては、他の学問と同等の立場において看護学が寄与しなければならない。また、複合的学際性のように共通の目的に対して、他分野と同等に看護学の立場で協力することをしなければならない。または、同形的学際性は生物学、物理学、化学の協力によって生物物理学が誕生したやうに、他分野と協力して新しい学問を誕生させる看護学の働きがなければならない。

1966年には、数学に貢献できる資格がないといわれた心理学が、その後の20年余で諸科学間において確固とした位置を築き上げた努力を学び、看護学の位置を明確にすることに挑戦したいと考える。

自らの研究生生活の反省から、今後正すべき姿勢を自分に云い聞かせる意味でまとめてみたものである。

参考文献

- 1) 芳賀純訳：「諸科学と心理学」評論社 昭45
- 2) 中村信夫：「学際研究のすすめ」P48-51 善本社 昭60
- 3) 内海澁：看護研究における概念枠組の重要性、看護研究19-4、P2-8、1986